

プラン・ジャパン

東日本大震災緊急・復興支援活動報告

(2011年3月～2012年3月)



子どもと築く、未来のしくみ



Plan
プラン・ジャパン

ごあいさつ



子どもたちの声に導かれて

公益財団法人プラン・ジャパン理事長 川上 隆朗

東日本大震災で被災された皆さまには改めて、心よりお見舞い申し上げます。

2011年3月11日、あの未曾有の大災害の直後、プラン・ジャパンは初の試みである国内での支援活動に踏み切りました。全てが手探りからのスタートでしたが、多くの関係者の皆さまのご支援、ご協力を得ながら、「東北の子どもたちを支えたい」との思いでひた走った一年間でした。

強い不安や恐怖、喪失などの体験をした子どもたちには、心のケアが必要であったことはいまでもありませんが、活動の中でプラン・ジャパンが特に力を注いだことのひとつに、子どもたちが必死に発している小さな声を聴き取ることがありました。そこで私たちが見たのは、自らの思いを写真や映像、文章という形に表現する過程で、復興の担い手としての自覚をいただく子どもたちの姿でした。そして、多くの大人たちがその声を受け取ることで、勇気と感動を与えられたのです。私たちは子どもたちの強さと柔軟さを改めて実感しました。

この報告書では、プラン・ジャパンのこれまでの活動を総括してご報告申し上げますとともに、皆さまからいただいた心のこもったご支援とご声援に、厚く感謝申し上げます次第です。

5つのカテゴリーで支援活動を展開

プラン・ジャパンでは、東日本大震災緊急・復興支援を、被災地でのニーズに応じて5つのカテゴリーで実施しました。「緊急支援物資支給」「学校再開に向けての支援」「被災地における心のケア支援」「避難所における子どものためのスペース設置」「子どもたちの声の発信」です。このカテゴリー別にご報告します。

※数字はすべて2012年3月末日のものです

もくじ

- 2 ごあいさつ
- 4 カテゴリー1 緊急支援物資支給 活動報告
- 6 カテゴリー2 学校再開に向けての支援 活動報告
- 8 カテゴリー3 被災地における心のケア支援 活動報告
- 12 カテゴリー4 避難所における子どものためのスペース設置 活動報告
- 14 カテゴリー5 子どもたちの声の発信 活動報告
- 16 被災地からのメッセージ
- 20 東北での活動マップ
- 21 東北の皆さんとともに築いたネットワーク、企業の皆さまからのご支援
- 22 会計報告
- 23 プラン・ジャパン 東北での一年、そしてこれから
- 24 「Go ahead～前進～」から抜粋



協力の「絆」を胸に

宮城県知事 村井 嘉浩

公益財団法人プラン・ジャパン様におかれましては、このたびの東日本大震災で被災した子どもたちに対し、震災直後から物資の提供や心のケアなど、様々な御支援をいただき、心より感謝申し上げます。

被災地における貴団体のこれまでの活動は、心に深い傷を負った子どもたちへのケアをはじめ、子どもたちを支える保護者や教員、保育士等にとりまして、大変大きな支援となったものと認識しています。

復興までの道のりは、決して平坦なものではありませんが、協力の「絆」を胸に、県民一丸となって復興を成し遂げ、ふるさと宮城の再生とさらなる発展に向けて、全力で取り組むことを固くお誓い申し上げます。

宮城県といたしましては、県民と手と手を携えながら復興へ向けて全力を尽くしてまいりますので、今後とも御支援、御尽力を賜りますようお願い申し上げますとともに、貴団体のますますの御発展と御活躍をお祈り申し上げます。



被災地の子どもたち、 大人たちに寄り添った一年

東日本支援対策室室長 膳 三絵

あの未曾有の東日本大震災から1年以上が経ちました。仮設住宅に住む被災した人びとは、暑い夏や厳寒の冬を乗り越え、家族や親戚、友人を亡くした人たちは今年の3月11日に、鎮魂の祈りをささげました。各地域の復興計画が少しずつ形になり、桜の季節を迎え未来に向けて歩み始める人が増えています。

大震災直後から被災地の子どもたちや彼らをとり巻く大人たちに寄り添って支援活動を続けてきたプラン・ジャパンも、その使命をひとまず終えました。この決断は大変苦渋に満ちたものでありました。現場で長らく被災者の方々や子どもたちに接してきたスタッフはもとより、連携・協働させていただいた多くの地元の方々、そして寄付やボランティアで活動を支えてくださった支援者の皆さまから、私たちが被災地から去ることを惜しむ声が数多く寄せられたからです。

人びとの抱える問題やニーズは、時間がたつにつれ変化します。プランが途上国における活動で行っているとおり、継続的に人と人の繋がりをつくって信頼と協力のもと、子どもたちや大人たちの自立的な回復力を促すことが復興への底力になると実感しています。その意味においても「子どもの心のケア支援」や「未来を写そう!」プロジェクト、「みんなで笑顔!」プロジェクトなどを通じて、この1年間に2万4千人以上の方とともに前へ進むことができました。

日本という先進国での緊急・復興支援は、行政をはじめ様々なアクターが奔走し、世界が目を見張るスピードで動いています。一方で、膨大な数の被災者へのきめ細かい対応が求められ、私たちがNGOとして力を発揮できる充実感と、未曾有の大災害に対しての無力感が交差する日々でした。

今後、プラン・ジャパンは活動を共にしてきた地元の支援組織や関係者の方々をできる限り側面から支援しながら、専門家の方々と連携して災害時の心理社会的支援への理解や、深刻で危機的な出来事に巻き込まれた人びとに対する心のケア・マニュアルなどを国内各地へ普及させる活動の継続と発展を図ってまいります。

皆さまからお寄せいただきましたご支援やご声援に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



緊急支援物資支給

目的 ▶ 避難所、仮設住宅で生活する方々が、できるだけ快適に過ごせるように物資面での支援をすることで、子どもの心身の健康と安全を守る

背景 ▶ 被災地のニーズは刻々と変化します。震災から2週間を経た時期、食料や医薬品は行き届きつつあるなかで、避難所生活のストレスを軽減する日用品の必要性があると、プランは判断しました



2011年3月27日、蛇田中学校の体育館にて

2011年 3月 27日

緊急支援物資を4トントラック 2台に積んで、一路、宮城県へ^①

石巻市の蛇田中学校(当時500人が避難)、門脇中学校(同900人)、万石浦中学校(同650人)、多賀城市の多賀城中学校(同400人)に、ファミリー・キット1,000セットや毛布を届けました。



避難所のボランティアの皆さんが、物資の運搬を手伝っていただきました



※各ページ小タイトル脇の数字は、各カテゴリーの活動集計の表にある数字と連動しています

緊急支援物資が ファミリー・キットだった、 その理由

ファミリー・キットの中身は、石鹸、タオル、歯ブラシ、爪切り、ノート、クレヨン、ひげそり、成人男女・男児・女児用の肌着など。子どもだけでなく、家族全体をサポートできる内容。避難所ではこうした物資を手にするだけで、避難所生活のストレスが軽減します。大人たちが安定した気持ちで子どもたちに接することができるのです。虐待などが増えがちな災害直後には、それが子どもにとって安心できる環境作りに役立ちます。



物資を手にした方の声

「水は飲用だけで洗濯ができないので、下着の替えを待っていました。お風呂に入れないので、子どもたちにはせめて下着だけでも清潔にあげたい」(40代・女性)

「夫はいただいたひげそりで、久しぶりにさっぱりできます」(50代・女性)

「絵や文字を書きたくても紙がありませんでした。このノートにお絵描きをしたいと思います」(小学生男子)



3月29日

避難所の子どもたちにはおもちゃを②



避難所となっていた、多賀城市文化センター内に開設された「子どもランド」におもちゃを届けました。おもちゃは、子どもたちが「安全な日常が戻ってきた」と心を落ち着かせるためには欠かせないツールでした。

4月末

仮設住宅に移る方々の 新生活スタートを応援③

名取市と岩沼市で、新品の毛布、タオルケット、その他の生活用品を配布しました。



物資を手にした方の声

「仮設住宅での生活を始めるにあたり、新品の毛布が手に入ってうれしいです。この毛布は、娘のために使います」

6～7月

暑い夏を乗り切るための 日用品を届けました④

多賀城市、塩釜市、七ヶ浜町で仮設住宅に入居された約1,000世帯に、日用品(扇風機、タオルケット、シーツ、物干し、目覚まし時計、台所小物など)を配布。



仮設住宅の集会所には、物資の配布を待つ皆さんの行列が

夏の必需品は住民の声を聞いて



スタッフからのコメント

無我夢中で物資を手渡しました
——プログラム部 寺田職員

震災直後はガソリン不足、工場の稼働停止、買占めなどによる品不足で物資の大量調達は困難を極めました。ファミリー・キット用の物資が揃ったのは被災地へと向かう朝。避難所の中学校4校には事前に確認をとり、訪問は食事時を避ける、責任者の指示に従うなど細心の注意を払いました。寒さが厳しい中、着の身着のまま避難された方がほとんどで、ご家族の安否もわからない方も多く、厳しい現実にかかる言葉を失いました。一方、この訪問をきっかけに、その後の学用品支給や子どもの声の発信などにつながるご縁ができたのは、ありがたいことでした。

■ 緊急支援物資支給 活動集計

活動内容	配布数・対象など
避難所で日用品や毛布、下着などを配布(多賀城市、石巻市)①	1,000世帯
避難所の子どものためのスペースに、文具やおもちゃを支給(多賀城市)②	1カ所
仮設住宅などで、毛布などを配布(名取市、岩沼市)③	1,000枚
仮設住宅で、生活に必要な物資を配布(多賀城市、塩釜市、七ヶ浜町)④	1,000世帯

学校再開に向けての支援

目的 ▶ 学校再開により規則正しい日常を取り戻すことで、子どもたちの心の安定を図るとともに、被災した子どもの学校生活を支える

背景 ▶ 被災して学用品や制服を失った子どもたちと、直接的な被害のなかった子どもたちが、同じ学校に在籍している状況でした。プランは学校による調査に基づき、被災した子どもたちへの支援を行いました



2011年 4月 22日

始業式の翌日に学用品を配布 ①

学業をスムーズに再開できるようにとの願いを込めて、多賀城市、松島町の被災した小中学生約850人に、学用品と防災ずきんを届けました。学用品を配布する地域は、宮城県やNPO/NGOで構成される、「子ども支援のための連絡調整会議」で重複のないよう分担しました。



学用品セットを手にした児童の皆さん。このあとさっそく中身を取り出す場面も

多賀城市内の小学校にて

学用品セットの中身は？



小学生には鉛筆、鉛筆削り、筆箱、消しゴム、スティックのり、色鉛筆、はさみ、セロテープ、定規、クレヨン、学年別ノートなど。中学生には、鉛筆などの文具類に加え、コンパス、三角定規、大学ノート、クリアファイルなど。プランが活動する中国やボリビアの子どもたちからの励ましのメッセージもそえられました。

4月末～7月

タクシー通学支援 ガレキの中の通学路から 子どもたちを守る！②

「消えたままの信号や崩れかけた建物など、二次災害につながりかねません」(多賀城市立八幡小学校の小関教頭)。そんな声を受け、スクールバスより安価で効率の良いタクシーでの通学を支援しました。



6月

体操着や 水着のニーズも⑤

学校からの要請を受け、夏の水泳の授業のため、水着の支援も行いました。



スタッフからのコメント



学校再開は、地域の最優先課題 ——プログラム部 山形職員

被災時、一日も早い学校再開が求められるのは、日本も途上国も同じです。特に当時は新学期が目前なのに多くの学校は避難所となっていました。教員たちは毎度の食事や物資の配布、居住スペースの整備などの先頭に立ち、教育委員会は被災した学校の生徒の受け入れ先の検討に奔走。自治体は被災者や遺族への対応や仮設住宅建設計画に追われるなど、誰もが難題を抱えていました。そんな中、協議を重ねていた宮城県教育庁からまず要請を受けたのが学用品や制服・運動着の支援でした。宮城生協さんや運送業者さんの協力を得て無事完了できたときにはひと安心しましたが、当時は活動を始めたばかり。頭の中はそれに続く活動のことでいっぱいだったのを覚えています。

物資を手にした方の声

「仕事を失い、収入がなくなってしまった保護者にとって、教材費が大きな負担となるのは間違いありません。支援によって、親に教材費を請求せずにすむことで、私たちが安堵しました」(小学校校長)

「どんな学用品もうれしい。物が少なくなってきたので」(小学生男子)

「皆が応援してくれている気持ちが伝わってきて、うれしかった」(小学生男子)

7月～10月

幼稚園・保育園も支援の対象に④

多賀城市と七ヶ浜町の、被災した幼稚園と保育園の計3カ所に、子ども用テーブルと椅子、ベビーチェア、お散歩車・避難車、石油暖房機、ハンドドライヤー、壁時計などを支援しました。



震災直後の多賀城市内の幼稚園。自衛隊に救助されました



日常を取り戻した子どもたち。後ろの暖房器具はプランの支援によるものです

2012年 3月中旬

小学校の卒業アルバムを支援⑤

亘理町の長瀬小学校の卒業生41人の卒業アルバム製作を支援しました。卒業式の前日、子どもたち一人ひとりに担任の先生から手渡されました。



「この卒業アルバムは一生の宝物にします」(男子)という声も



■ 学校再開に向けての支援 活動集計

活動内容	対象人数
被災した小中学生に学用品や防災グッズを配布(多賀城市、松島町) ①	13校、850人
徒歩通学が困難な地域から通う小学生のタクシー通学を支援(多賀城市) ②	70人
被災した小中学生に体操着や制服を配布(多賀城市、塩釜市) ③	640人
被災した小中学生に教材や備品を支給(松島町、亘理町、多賀城市) ⑤	810人
被災した幼稚園・保育園に備品を支給(多賀城市、七ヶ浜町) ④	3カ所
被災した高校に体育用品を支給(石巻市、名取市)	4校

被災地における心のケア支援

目的▶ 心理社会的支援活動で子どもたちの心理的負担を軽減し、回復力を引き出す。
そのために、周囲の大人たちが子どもの心をケアできるように、保護者や教員を支援する

背景▶ 子どもたちの中には、地震と津波への恐怖から強い不安を抱いている子が見受けられました。
一方、教員や保護者たちは、震災後の子どもたちへの接し方にとまどうと同時に、
生活の激変により自らも精神的に大きなストレスを抱えていました



「みんなで笑顔！」プロジェクトでアフリカの太鼓を演奏する子どもたち

2011年 3月 19日

心理ケア専門家とともに、 初めて被災地に①

ブラン国際本部所属の、災害対策専門家で医師のウニ・クリシュナンを伴い、ブラン・ジャパンのスタッフ3人が宮城県多賀城市に。市役所にて、山形大学の上山真知子教授とともに、市内の小中学校教員約20人に、「震災後の子どもへの接し方」について話しました。

クリシュナン医師は、4月6日には再び宮城県入りし、250人の教員と保護者、4月7日には小児科医や臨床心理士ら30人にアドバイスをしました。



クリシュナン医師(右端)と子どもたち

クリシュナン医師による 「震災後の子どもの心のケア」 5つのポイント

- 1 異常な行動をとるのはよくあること**
災害後に赤ちゃん返りするなどの行動は、よくある反応。
しばらくすれば収まるので、なるべく触れ合ったりして安心させて
- 2 子どもたちの声に耳を傾ける**
子どもの抱える恐怖や要望に気づき、適切なサポートを
- 3 ゲームなどの楽しいグループ活動を行う**
「ひとりじゃない」と感じることで、心が安定します
- 4 作文や絵などで、感情を表現できる場を作る**
感情を抑え込んだまましていると、心の負担が蓄積します
- 5 子どもをケアする大人をケアする**
身近な大人の心の安定が、子どもの心の安定につながります

4月12日

「ケア・宮城」との連携が決定

震災後に、宮城県内の3つの心理士会や大学の教員の有志が結成した「ケア・宮城」。プランと連携して、「子どもの心のケア支援」にあたることが決定されました。クリシュナン医師から心理社会的支援のガイドラインについてメンバーに紹介し、これがその後の活動の指針となりました。

5月5日

「“こどもの日”フェスティバル」を開催②

多賀城市の多賀城中学校にて、「こどもの日」を楽しんでもらうイベントを開催。子どもたちには遊んだり学んだりできる様々なアクティビティを用意。保護者には、「子どもの心のケア」ワークショップを設けました。

「PTAの時間」と題したワークショップでは、保護者が震災で不安定になった子どもへの向き合い方を学びました



5月28日

子どもの心のケアについてのフォーラムを開催③

「震災後の子ども支援」と題したフォーラムを「ケア・宮城」と仙台市にて共催。教員や心理士らを対象に、専門家たちが「子どもの心のケア」の大切さを訴えました。

5月28日

障がいのある子どもたちに「ふれあい音楽会」を④

多賀城市内の特別支援学級に通う子どもたちのために、童謡サークル「ムジークドゥラメール」の協力で、音楽会を開きました。美しい日本語からなる童謡と出会い、歌ったり踊ったりすることで、心のケアにつなげることを目的として、計6回開催されました。



「はたらくくるま」という歌は、車の絵を持ちながら歌いました



「おやつ時間」では、特大のカステラに歓声が

参加者の声

「バネ電話を作らせてもらって楽しかった」（“こどもの日”フェスティバルに参加した小学生）



真っ白なこいのぼりに絵を描いていく「図画の時間」

「今日はこどもの日なのに、どこにも連れて行ってあげられなかったで、こういう場があって本当によかった。いい思い出になりました」（“こどもの日”フェスティバルに参加した、小学生のお子さんをもつお母さん）

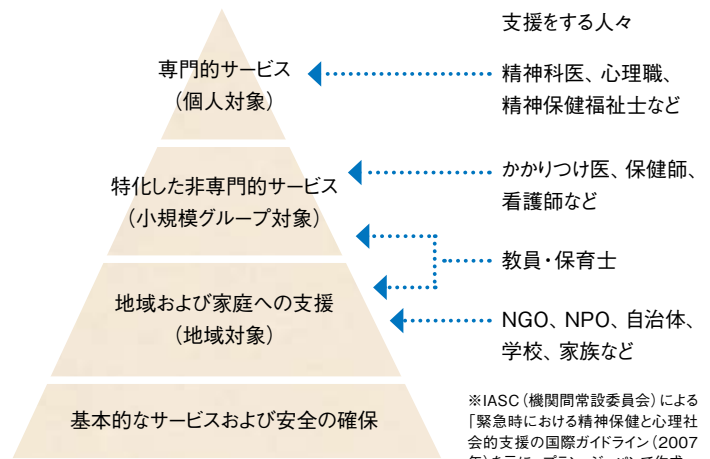


ペットボトルを倒すチームと立てるチームが競う「体育の時間」。長らく避難所生活で、十分に体を動かすことができなかった時期。広い体育館で、久しぶりに体を動かすことができました

世界基準の「心のケア」心理社会的支援活動とは？

被災した人々の回復力を引き出すために、個人と社会の密接なつながりに焦点を当てて支援していく活動。

被災したすべての人々を対象に、生存に必要な基本的支援を行いつつ、心の安定を図ります。人々の心理的な状況に応じて、以下のピラミッドの階層に沿った支援を行います。



プラン・ジャパンが行うのは、上から3番目の「地域および家庭への支援」。地域や家族が一人ひとりの心の健康を守ることができるよう、側面からサポートします。

ケア・宮城との連携による「子どもの心のケア支援」ワークショップを宮城県内各地で実施⑤

「震災後の子どもの心のケア」について、教員や保護者を対象に講演とワークショップを実施。学校や教育委員会などからの依頼が相次ぎ、子どもたちにどう向き合うべきか悩んだり、自身もストレスを溜め込んだりしていた教員や保護者の皆さんに、子どもの心のケアについての知識を伝え、ストレス軽減もできる機会を提供しました。

対象が教員や保護者などの大人たちである理由は？

震災後の初期段階では、できるだけ多くの子どもの心をケアし、彼らが抱える心の負担を減らすことが重要です。これは、震災前から子どもたちが馴染み親しんでいる大人たちが日常生活の中で行うのが最も効果的。子どもを支える立場の大人たちに「子どもの心のケア」の方法を伝えるとともに、大人たち自身が震災によって抱えるストレスを解消する必要があります。

震災後の初期段階では、できるだけ多くの子どもの心をケアし、彼らが抱える

海外の専門家が着任⑥

オランダ人医師のマルグリット・ブラウ（右）、インドネシア人心理士のフェティ・ザクラ（左）が、「子どもの心のケア」プログラムアドバイザーとして着任しました。宮城県や地元NPO、他の国際NGOらで構成される「子ども支援会議」による「心のケア」ガイドラインを中心になって作成するなど、宮城県内での心のケア支援活動の基準作りに貢献しました。



不安や悲しみを口にできない人々

—— プログラムアドバイザー ザクラ職員

ワークショップでは、話している最中に泣き出したり、震災から6カ月経って初めて自分の経験を口にすることができたという人もいました。彼らは誰かに自分の気持ちを打ち明けたいと思いつつ、話すことで他の人に迷惑をかけたり、重荷になることを恐れていました。また、自分の状況や経験してきたことを相手がきちんと理解してくれるかどうか、自信が持てずにいたのです。被災した人々が、不安や緊張を解き放つことはとても重要。心の問題を深刻化させずに済む場合が多いからです。

小学生の保護者向け「子どもの心のケア支援」ワークショップの流れ

1 ワークショップのねらいを参加者に伝えます

「ねらいは、震災後に子どもや大人に起きる変化を知って、お互いをサポートできるようにすることです」

「参加したくないアクティビティは休んでもいい」「このワークショップ中に聞いた個人的な話は他言しないで」なども伝えます。

2 「震災後、周囲のお子さんで言動が変わったケースはありますか？」と問いかけ

「親や先生にまわりつく」「音に対して敏感になる」「年齢よりも幼い行動」「イライラしやすい」「学校で集中できない」

司会者から、こうしたよくある反応を伝え、災害後にこの反応が出るのはありうること、反応が出る時期や程度には個人差があることも伝えます。

3 グループになって、「子どもたちのために何ができるか」を、書き出してもらいます

「一緒に遊んだり、食事をしたりする」「不安を受け止めてあげる」「抱きしめる」「気分転換に、好きな場所にお出かける」

こうした意見が出るほか、「規則正しい日常生活を守る」「バランスのとれた食生活」「子どもと話す時間を作る」「安心させてあげる」「震災報道のニュースを見る回数を減らす」などの対処方法をご紹介します。

4 「大人の心のケア」についても伝えます

「集中して相手の話を聴く（傾聴）」「自分のために時間をとる」「読書やカラオケなど、自分の好きなことをしてリラックスする」

子どもをケアするには、まずは大人がお互いを、そして自分自身を上手にケアできるようになる必要があることを伝えます。その後、二人一組になって、自分が抱えている不安やリラックス方法などを語り合ってもらいます。同じような思いを分かち合うことで、大人たちのストレスも軽減されます。



模造紙に描かれた子どもの絵に、親が何をしてあげられるかを付箋に書いたものを貼っていきます



アフリカンドラムで心のケア支援 ⑦

「みんなで笑顔！」プロジェクトと題し、南アフリカのアーティスト、ドラムカフェによる参加型演奏会を、学校や仮設住宅集会所で開催。参加者全員での太鼓演奏で一体感を感じ、ストレスを解消してもらうのが目的です。



最後には、演奏者と参加者が一体となってダンスをします



思春期の中学生。最初は恥ずかしがりながらも、次第に演奏に夢中に

「みんなで笑顔！」プロジェクト参加者の声

「家が全壊し、ショックと疲労、無力感が続いていた。今日は久々に大声を出せてストレス発散になった」(43歳男性)

私はひとりじゃないと感ずることができました(中学生女子)

「全校生徒一緒に太鼓をたたいて一つになる、いい思い出となりました。まだ復興には、たくさんの時間がかかるけど、元気が出てきました」(高校1年生)

「子どもの心のケア支援」参加者の声

「ストレスや不安の解消は、皆でいっぱい話すことが一番良い方法なのだということを体験しました。生徒に対しても同じで、いっぱい聞いてあげたいと思いました」(中学校教員)

「職場ではなかなか話題にできないことが話せて、うれしかった。『子どもたちの話を聞いてあげよう』と強く思うとともに、『私たち教師も、この震災で経験した色々なことを話したい、聞いてほしいんだ』と気づいた」(小学校教員)

災害時の心のケアのマニュアル発行に協力

WHO(世界保健機構)が2011年に作成したマニュアルの日本語版「WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA):現場の支援者のガイド」の発行に協力。独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの監修のもと、ケア・宮城とともに翻訳作業を担当しました。



WHO発行のオリジナル版

心理的応急処置のポイント

- 専門家が行うカウンセリングではない
- 被災者のニーズや心配事を把握し、「基本的ニーズ」(食糧、水、情報など)を確保するための手助けをする
- 話を聴く(ただし、話すことを無理強いしない)
- 被災者の文化、尊厳、権利を大切にす など

変化する「子どもの心のケア」のニーズ

——「ケア・宮城」代表、
宮城学院女子大学名誉教授
畑山みさ子先生



震災直後から3カ月くらいは、幼児では「親から離れられない」「赤ちゃん返り」などの報告があり、小・中学生の一部では「落ち着きがない様子」「集中力や成績の低下」が見られました。半年が経過した頃には、こうした様子は減る一方、粗暴な言動が目立つようになるケースもありました。「教員が自らの心身の健康を保ちながら、子どもに元気に向き合えるよう支援する」という初期の目的は、ある程度達成できたと考えています。しかし、阪神淡路大震災の際には、震災から4年間は子どもの心に関する相談が増え続けたという報告があり、今後はより専門的な対応が必要になると考えられます。

被災地における心のケア支援 活動集計

活動内容	回数・参加人数など
教育委員会主催の教員向け研修に協力、小中学校の教員が参加(多賀城市) ①	小中学校の教員250人
「こどもの日」フェスティバルを開催(多賀城市) ②	地域の子どもたちなど約350人
上記フェスティバルにて保護者向けに心のケアのワークショップを実施 ②	15人
心理士のグループ「ケア・宮城」とともに、子どもの心のケアに関するフォーラムを開催(仙台市) ③	2回開催 240人が参加
障がいがある子どもたちのための音楽会を支援(多賀城市) ④	6回開催、70人
「ケア・宮城」とともに教員・保護者向けの心のケアワークショップ開催(宮城県、岩手県) ⑤	58回実施 約3,000人
プラン・ジャパンの心のケア支援プログラムアドバイザーとともに、保育士・保護者向けの心のケアワークショップを実施(宮城県) ⑥	36回 約490人が参加
NPO・ボランティア向けのストレス管理ワークショップを実施(宮城県、岩手県)	14回 約270人
「みんなで笑顔！」プロジェクトとして、アフリカンドラム演奏会を含む、参加型コンサートを開催(宮城県、岩手県、福島県) ⑦	135回約1万2,800人

避難所における 子どものためのスペースの設置

目的▶ 子どもたちが自由に遊んだり、学んだりできるスペースを確保することで、子どもたちの心の安定をはかるとともに、大人が仕事や復興に集中できる環境を整える

背景▶ 子どもたちは避難所や仮設住宅で、他の被災者に気兼ねしながら遊ばざるをえませんでした。元気のいい子どもたちの行動がお年寄りには負担に感じられることもあり、親たちはストレスを溜めていました



多賀城市総合体育館の中に設置された、「子どものためのスペース」

2011年 4月29日

避難所に「子どものためのスペース」をオープン！①

当時、多賀城市総合体育館には約440人（うち未就学児と小中学生が合わせて45人）が身を寄せていました。プランは管理事務所に提案し、2階廊下の一部に「子どものためのスペース」を開設。避難所が閉鎖された8月からは、近隣にできた仮設住宅の集会所に場を移して運営しました。

8月までに延べ800人の子供たちが利用しました



多様な役割を担う 「子どものためのスペース」

「子どものためのスペース」には、「安全な遊び場を子どもたちに提供す

る」のはもちろん、子どもたちが生活のリズムを取り戻す、他の子どもと交わることで集団生活を学ぶ、教育的な遊びをすることで学校生活に戻りやすくする、などいくつもの機能があります。また、子どもに遊び場ができることで、親たちは仕事や被災した家の片付けなどに専念できます。

参加者の声

「こうした場を作ってもらえると、子どもたちが気兼ねなく大笑いしたり、はしゃいで大騒ぎしたりできます。それがとてもありがたいです」（3人の子のお母さん）

「子どもたちに笑顔が戻ると、避難している大人たちも明るくなってきて、「子どものためのスペース」の必要性が分かった。これが地域全体の復興につながっていくのだと思う」（避難所運営スタッフ）

5月～2012年3月

季節感あふれる各種イベントで、住民の交流促進②

夏祭りやクリスマス会などのイベントを、避難所や仮設住宅の集会所で開催。楽しい思い出を積み重ねていくことが、子どもたちにとって津波や地震のショックから元気に立ち上がっていく力になります。

同7月、避難所の閉鎖の前に、多賀城市総合体育館で夏祭りを開催。花火や夜店を楽しみました



2011年5月、ピエロによる避難所の訪問



同10月には、多賀城市の仮設住宅の敷地で「芋煮会」



同12月、多賀城市総合体育館で、クリスマス会を開催

参加者の声

「これからは支援ばかりに頼らず、できることから少しずつ生活を取り戻していきたいと思う」
(仮設住宅入居者の方)

「集会所のイベントに参加して、初めて会った方と話しができて楽しかった」
(仮設住宅入居者の方)

12月～2012年3月

仮設住宅集会所に冬の必需品を支給③

仮設住宅の集会所に電気カーペットや石油ストーブ、雪かき用スコップなどを届けました。集会所を暖かく快適な団らんの場にする事で、住民の方同士の交流を促進するのが目的です。



企業の支援により開催された日曜大工の講習会ではベンチ作りに挑戦



スタッフからのコメント

ふさがちな子どもたちに笑顔が戻る場所

—— プログラム部 番場職員

「子どものためのスペース」では、子どもたちが復興へ向けて進んでいくために、ちょっとひと休みしてもらえる空間を提供できて感じています。避難所では週6日、仮設集会所では週4日、プラン・スタッフが朝から夕方まで常駐し、子どもはもちろん、保護者や行政職員の皆さんにも、「いつもプランがいる」と安心し、信頼してもらえる関係作りができました。今では、住民の方たちと冗談を言い合いながらお茶を飲んだり、時には子どもをしかったりしています。避難所で開設した去年4月、子どもの遊ぶ声にげげんな顔をしていた男性が、数カ月後には子どもに優しく話しかけていた姿が今でも忘れられません。

■ 避難所における子どものためのスペースの設置 活動集計

活動内容	対象人数
避難所に「子どものためのスペース」を2011年4月から8月まで設置、週6日運営(多賀城市) ①	延べ800人以上が利用
運営スタッフ、ボランティアのトレーニングを実施(多賀城市)	6回、100人
仮設住宅集会所に「子どものためのスペース」を2011年8月から2012年3月まで設置、週4日運営(多賀城市)	延べ640人以上が利用
避難所や仮設住宅集会所にて、住民交流促進のための各種イベントを開催(多賀城市、七ヶ浜町) ②	11回、840人
仮設住宅集会所にストーブやこたつなどを支給(多賀城市、塩釜市、七ヶ浜町) ③	18カ所

子どもたちの声の発信

目的 ▶ 被災地の子どもたちが自ら声を発信する機会をつくることで、子どもたちの自信と成長につなげる。
また、彼らの声を地域の復興や、子どもが暮らしやすい環境作りに生かしてもらう

背景 ▶ 地域が復興に向かうなか、子どもたちが意見や要望を発表する場はなかなか与えられません。
そこで、子どもたちが「復興の主体者」として活躍できる機会を設けました



2011年 7月

「未来を写そう！」プロジェクトで、 子どもたちの視点や声を発信 ①

石巻市立開北小学校と女川町立女川第二小学校の児童の皆さん（計56人）が、「生まれた絆」「復興の芽」「将来の夢」をテーマに写真を撮影。七ヶ浜中学校の生徒（9人）は、災害対策の課題を2本（各10分）の映像に記録しました。

途上国の被災地でも、
子どもの声を発信！

ハイチ大地震、スマトラ津波の被害にあったインドの東海岸。ブランは、これまでも途上国の災害被災地で、子どもたちの声を写真や映像で発信してもらった活動をしてきました



互いを撮影し合っては
確認します

七ヶ浜中学校の皆さんは、
学校、スーパーなどで地域の
の人々の声を記録しました





子どもたちが撮影した作品



参加者の声

「助けてくれたボランティアや自衛隊の人たちと生まれた絆を写真で撮って、感謝を伝えたかった」(小学校6年生男子)

「僕たちの写真を見て、地域の人が元気になってくれたらうれしい」(小学校5年生男子)

「このプロジェクトのことを聞いたとき、参加すべきか迷いました。しかし、子どもたちは支援を受けるばかりでなく、復興に向かう姿を写真で発信することで、支援する側に立つことができると考えました」(石巻市立開北小学校 横江先生)

「報道写真とは違って、同じ目線でとらえた写真が新鮮」(写真展の来場者)



スタッフからのコメント

子どもたちに支えられて

—— 支援者サポート部 大谷マネジャー

振り返れば、震災からたった3～4カ月の学校現場で、写真・映像プロジェクトの参加校がすぐ決まったことは奇跡でした。そこで出会った先生方や子どもたちに、そして生まれた作品に支えられたのは私自身だったと思います。写真展や報告会では、来場者の感嘆の声やその笑顔に共感し、何度開催してもその都度一緒に元気になれました。また、日本と途上国では、カメラやビデオといった「メディア」の普及率が異なるため、同様のアプローチが功を奏すのか不安もありましたが、臆せず機器を使いこなす日本の子どもたちならではの、大胆で前向きな表現ができました。それが、作品に説得力を加えています。

9月11日

東京で子どもたちがメッセージを発信！②

震災から半年を迎えたこの日、東京・秋葉原にて、子どもたちの写真と映像が発表されました。七ヶ浜中学校の生徒の皆さんは、約200人の来場者を前に、自分たちの経験を語りました。こうした写真・映像展は、2012年3月までに宮城県各地や東京などの13カ所でも開かれました。



「故郷を再生させるのは私たち」と伝える、七ヶ浜中学校の皆さん



JR仙台駅での写真展 (2012年3月21～22日)

2012年 3月

被災3県の子どもたちの作品が詰まった冊子が完成！③

2011年の秋、岩手県、宮城県、福島県の子どもたちから、フォト&エッセイや絵を募集。18校500人から200作品が寄せられました。上記の写真や映像とあわせて、「Go ahead ～前進～」という冊子が完成しました。



子どもたちの「前に進む力」にあふれた一冊

■ 子どもたちの声の発信 活動集計

活動内容	対象人数
「未来を写そう！」写真プロジェクトを実施、参加(石巻市、女川町) ①	小学校2校から56人が参加
「未来を写そう！」映像プロジェクトを実施(七ヶ浜町) ①	中学校1校から9人が参加
子どもラジオ番組に協力(多賀城市)	中学校1校から8人が参加
子どもマガジン「Go ahead～前進～」を製作(宮城県、岩手県、福島県) ③	小中高校18校から500人が参加
子どもたちの活動と作品を発表する写真展やイベントを開催(東京都、宮城県) ②	13回

被災地からのメッセージ



多賀城市内の幼稚園にて

「遊ぶこと」。子どもにとって、それは生存をかけた活動

上山眞知子先生

山形大学教授、臨床心理士、「ケア・宮城」役員



子どもは支援を受けるだけの存在ではなく、その成長や発達に家族やコミュニティを変えていく力を持った支援者でもあります。このことは、避難所での子どもたちの姿が実感させてくれました。「こんな時に遊びたいって言えないよね」と言っていた子どもたち。その願いを

実現させる遊び場ができたことで、子どもたちは少しだけですが元の生活の実感を取り戻すことができました。水や食料、毛布と同じように、子どもにとって必要だったのは、「世界は元に戻る」という実感だったのだと思います。

子どもたちが元気になれば、親が落ち着く、子どもたちの笑顔が見たくて大人たちが仕事の手を休めやってくる、遊んでくれる。やがて子どもたちは、「お手玉を教えてもらおう、剣玉を教えてもらおう」と、避難所で元気をなくしていたご年配の方たちの元を訪れ

るようになりました。無気力になっていた高齢者を今度は励ます側に回っていったのです。なかには、広汎性発達障害が疑われる子どももいました。子どもたちはそのような子をも上手に仲間に入れて遊んでいるという姿もありました。

5月5日の子どもの日には、プラン・ジャパンの協力を得て“こどもの日”フェスティバルを開催しました。まだ余震が激しく、食品の購入もままならない不便な状況のなか、親子で1日安心して遊びましょうという呼びかけでした。大人たちは疲弊し、子どもと一緒に遊びたいがそれどころではないという現実がありました。そのなかでのフェスティバルの開催は、親と子がふれあいながら遊べる機会となりました。多くの親子は遊んだことで心の余裕が生まれ、「楽しかった!」という思いを共有することができました。この時の子どもたちにとっては、とりえず元気になるということが必要でした。

子どもたちにとって遊びとは、単なる気晴らしではなく、心身の健やかな成長にとって必要不可欠な活動です。震災の混乱のなかで子どもたちの気持ちは置き去りにされ、大人はその願いを聞き届けるだけの余裕がありませんでした。大人でさえ取り乱し、絶望するのが当たり前の状況。こうした異常な状態を、なんとかやり過ごす必要がありました。子どもたちにとって遊びの場は「心のエネルギー補給」の場であり、過酷な現実を受け入れるための「空間」である必要があるのです。

笑顔を届けてくれたアフリカンドラム

山村ミズエさん 宮城県女川町の仮設住宅に居住

地震発生時は、夫と一緒に集合住宅の3階にある自宅にいました。避難のためいっしょに外に出たのですが、サンダルで出てきてしまっていた夫は、ちらつく雪を見て、靴に履き替えようと自宅に引き返しました。夫の姿を見たのはそれが最後となりました。その数分後に町を襲った巨大な津波に、夫は流されてしまったのです。遺体は見つかっておらず、今も行方不明のままです。

被災後、一時は横浜の娘宅に避難しましたが、ひとりで生きていこうと女川に戻ってきました。夫はとても優しい人でした。孫たちはみんな夫のことが大好きでした。私は毎日彼の写真に話しかけ、どうしてあの時引き返したのかと問いかけ続けています。

あの日以来、朝となく、夜となく悲しみに涙するばかりでしたが、アフリカンドラムの演奏会（「みんなで笑顔」プロジェクト）に参加し、久しぶりに心から笑うことができました。こんなに笑ったのはいつ以来か思い出せないほど、楽しい時間を過ごすことができました。



※その後、ご主人のご遺体は見つかり、山村さんは「ひと区切りついた」とおっしゃっていました

避難所となった学校で

鈴木朝二先生

宮城県七ヶ浜町立七ヶ浜中学校校長



3月11日から1カ月間、私たち教員は避難所となった学校で生徒や住民のお世話をしなければなりません。多くの教員が震災の被害を受けており、家族の安否を確認できぬまま避難所の運営に携わっている先生もいるなかでの支援活動となりました。

学校における避難所運営という厳しく困難な状況にあって、我々は心の平静を失うことなく、どうしたら子どもたちを助けられるのか、どう行動どうすべきなのかについて、次々と意思決定を行ってきました。次にこのような状況が発生した場合は、よりスムーズに行動し、さらに多くの人々のお世話をすることができると確信しています。この意見にはどの先生も同意するでしょう。

これらの苦難の経験で学んだのは、教員の使命は生徒たちを支援するだけでなく、地域住民を助けることも同様に大切であるということ。私はこの教訓をより多くの人々に知らせたいと思っています。

カメラを通して見た、 私たちの町・福島

福富春花さん

福島県立郡山東高校1年生(2011年度)

冊子「Go ahead～前進～」(P15)に写真部として参加

撮影を通じて、現在の福島は周りの人々が思っているほど沈んではないということが再認識できました。放射能による風評被害が騒がれていますが、それで福島=放射能というイメージだけを持つことはやめていただきたいと思うと同時に、もっとさまざまな側面から福島を見てほしいです。

放射能への不安から閑散とした公園。またいつの日か、子どもたちが安心して元気に遊ぶ姿が戻ることを願って……
撮影:福富春花





教員向け心のケア支援の 必要性を提言

佐々木清光先生

宮城県多賀城市教育委員会 学校教育課長

震災直後に開いた、市内の小中学校教員向け「子どもたちの心のケア」オリエンテーション。これに参加したプランの災害対策専門家に、「被災した子どもたちにどのように向き合うべきか?」についての有益なアドバイスをいただきました。

この経験もあり、その後プランが提案していた、「教員と保護者のための子どもの心のケア・ワークショップ」が実現できるよう、市や学校に働きかけを行いました。先生方が、地震と津波を経験した子どもたちへの接し方について悩んでいることを、私は心配していたのです。

実現したワークショップで、子どもたちそれぞれが持つ「話したい」という気持ちを知り、話にきちんと耳を傾けることが重要であると分かりました。ここで学んだ知識やノウハウは、参加した先生からまた別の先生に伝えることで、さらなる広がりを見せています。



変わり果てた母校を前に

新野佳世

プラン・ジャパン東日本大震災支援対策室 仙台採用スタッフ

私の母校、宮城県石巻好文館高校(旧名:石巻女子高校)は、創立100周年を迎えた2011年、震災で大きな被害を受け、その後は避難所として使用されました。

震災から2週間後、私は卒業してから初めて母校を訪れました。その時私が母校の校庭で聞いた音は、高校生の歓声ではなく、自衛隊のヘリコプターのけたたましい音。目に入った景色は、自衛隊の炊き出しの車、迷彩服を着た隊員たち。炊き出しを待ちながら列に並んでいる人々には、笑顔がありませんでした。校舎の3階の窓には、震災発生時に自衛隊のヘリに助けを求めたのでしょうか、「SOS 1600人」の文字が並んでいました。

そんな好文館高校をはじめとする石巻と名取の被災高校4校に、プランは体育用品の支援を行いました。配布の際、ひとりの先生から「親が仕事を見つけられないため、高校生がアルバイトをせざるを得ないこともあり、部活の参加者が少なくなった」という話しを伺いました。そんな状況のなか、少しでもスポーツを楽しめる環境を整えられたらうれしいです。

気兼ねなく子どもを遊ばせられる場所を

櫻井里枝さん 宮城県塩釜市の仮設住宅に居住

現在住んでいる仮設住宅は狭く、遊ぶスペースがあまりありません。子どもたちは遊びなれた広さと違うため、最初は遊び方に悩んでいるようでした。

また、近隣の仮設住宅の住民のほとんどは高齢者です。子どもたちはどうしても騒いだり、はしゃいだりするので、彼らの迷惑になっていないか気になっていました。

できれば、両親と同居していた自宅に戻りたいのですが、津波の心配があるため、戻れそうにありません。両親とは別々に暮らすことになるかもしれませんが、もっと広い家を見つけて引っ越したいと考えています。



保育園再開に向けた支援を受けて

鈴木慶祐さん 宮城県多賀城市大代保育園園長

園に一泊した子どもたちを翌日親元に無事帰すことができた後、私たち職員は先が見えないまま園舎の泥かきを始めました。体力も限界に近づいてきた頃に届いた、皆さまからの支援。「私たちにはこんなにも支えてくれる方々がいるのだ」ということを知り、それを励みに一歩前に進もうという気持ちになりました。

おかげさまで園舎の改修工事も終わり、今は毎日元気な子どもたちの声が響き渡っています。まだまだ放射能や余震など心配事はつきませんが、子どもたちが毎日安心して過ごせるよう、そして皆さま方からの支援が決して無駄にならないよう、職員一丸となって取り組んでいきたいと思っております。



保育園からプラン・ジャンプの事務局に届いたお礼状

「子どものためのスペース」の運営にたずさわって

高橋祥江

プラン・ジャンプ東日本大震災支援対策室 仙台採用スタッフ



多賀城市の自宅の一部が地震で破損したため、現在は夫と賃貸住宅に暮らしています。石巻市に嫁いだ娘は、津波で2人の子どもと義理の両親を失いました。しかし、被災を理由に人生をあきらめるようなことをしなかった私は、同じ被災者を助けたいと2011年4月にプラン・ジャンプのスタッフとなり、避難所となっていた市内の体育館に設置された「子どものためのスペース」の運営を担当しました。

スペースを利用する子どもの保護者には、まずどういう形で被災したかについて聞いてから接するようにしました。ここにはまだ言葉を話せない乳幼児も遊びに来ました。震災直後、落ち着きがないように見えた子どもたちは、学校が再開すると自然に自分を取り戻していきました。

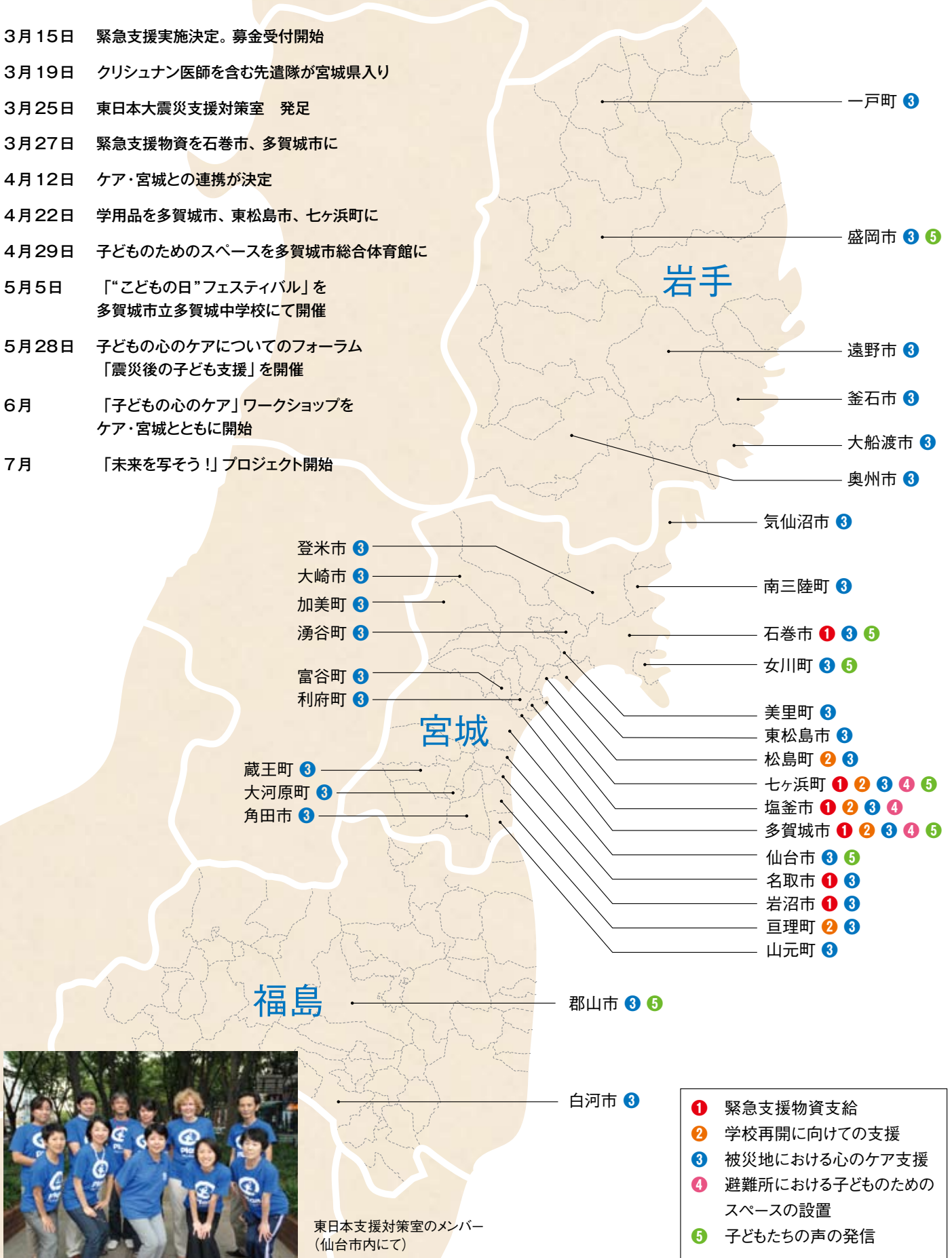
仮設住宅集会所に設置した「子どものためのスペース」は、子どもたちのほか高齢の住民も集う場になりました。高齢者には、社会人にとっての会社や子どもたちにとっての学校のような通うべき場所がなく、とても孤立した存在となっていたのです。

支援を続けるなかで、相手の感情を察することの大切さに気づきました。信頼関係を築き、相手から話してくれるようになれば、スペースの運営はできなかつたと思っています。

プラン・ジャパン 東北での活動マップ

プラン・ジャパン 初動カレンダー

- 3月15日 緊急支援実施決定。募金受付開始
- 3月19日 クリシュナン医師を含む先遣隊が宮城県入り
- 3月25日 東日本大震災支援対策室 発足
- 3月27日 緊急支援物資を石巻市、多賀城市に
- 4月12日 ケア・宮城との連携が決定
- 4月22日 学用品を多賀城市、東松島市、七ヶ浜町に
- 4月29日 子どものためのスペースを多賀城市総合体育館に
- 5月5日 「こどもの日」フェスティバルを多賀城市立多賀城中学校にて開催
- 5月28日 子どもの心のケアについてのフォーラム「震災後の子ども支援」を開催
- 6月 「子どもの心のケア」ワークショップをケア・宮城とともに開始
- 7月 「未来を写そう！」プロジェクト開始



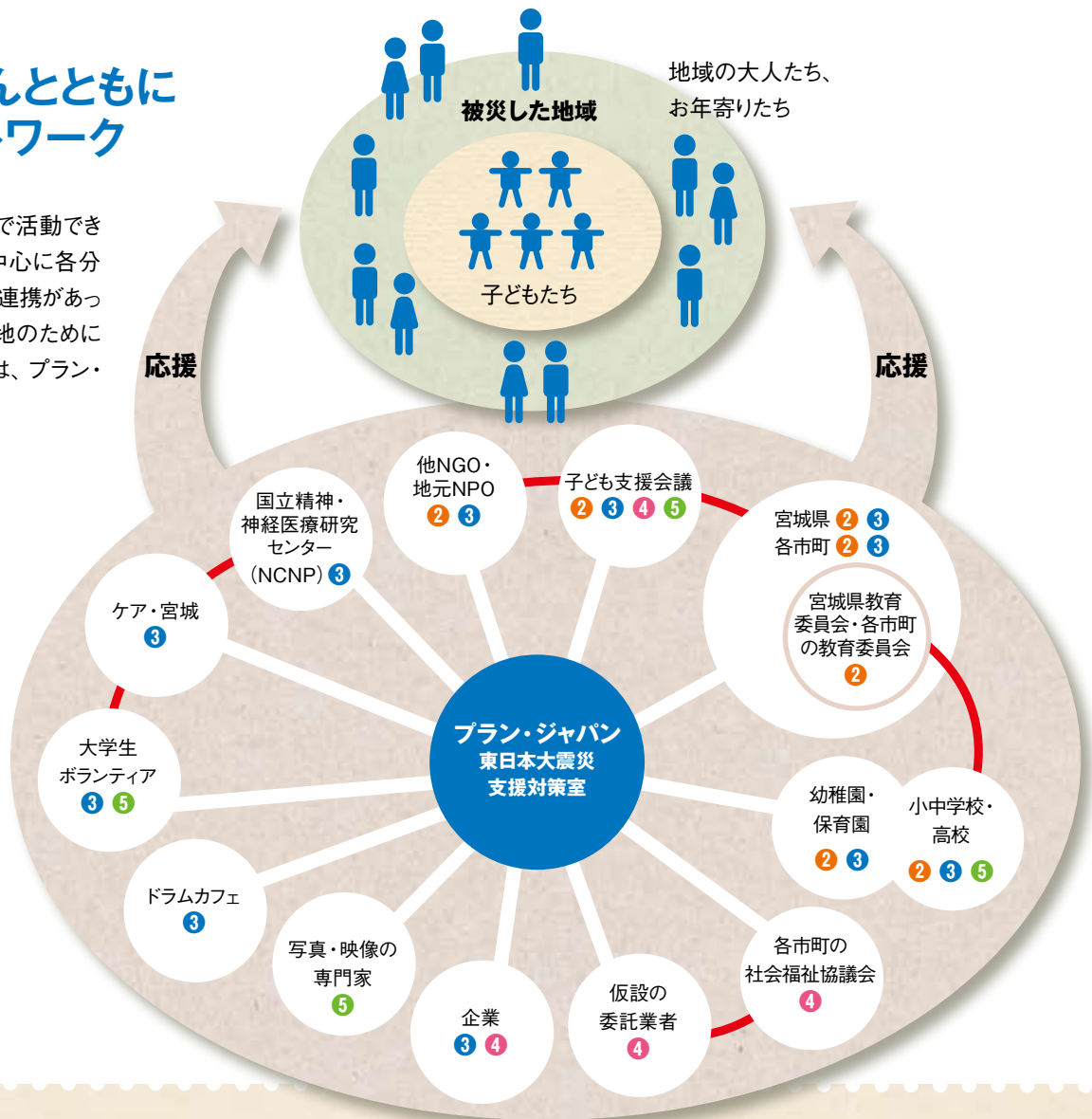
東日本支援対策室のメンバー
(仙台市内にて)

- ① 緊急支援物資支給
- ② 学校再開に向けての支援
- ③ 被災地における心のケア支援
- ④ 避難所における子どものためのスペースの設置
- ⑤ 子どもたちの声の発信

東北の皆さんとともに築いたネットワーク

プラン・ジャパンが東北で活動できたのは、地元の方々を中心に各分野で活躍する皆さまとの連携があったからこそ。ともに被災地のために活動したこの経験と絆は、プラン・ジャパンの財産です。

□ 連携
■ 協力



企業の皆さまからのご支援

物資の提供や貸与、イベントの共催など、企業の皆さまからも様々なご支援をいただきました。ここでは、そんなコラボレーションの形をご紹介します。

森永製菓株式会社

「1チョコfor1スマイル」キャンペーン(2011年10月)で東北の子どもたちを支援してくださいました。5月5日の「“こどもの日”フェスティバル」(P9)には、キョロちゃん子どもたちにお菓子をプレゼントしてくださいました。



株式会社学研ホールディングス

学用品支給 (P6) の際に、自由画帳とクレヨンを提供いただきました。また、5月5日の「“こどもの日”フェスティバル」(P9) には、「おもしろ科学工作教室」を開催。子どもたちに、好評を博しました。



キヤノン株式会社

「未来を写そう!」プロジェクト (P14) で、子どもたちが使用したデジタルカメラ30台とビデオカメラ1台を貸与いただきました。



ソニー株式会社

「未来を写そう!」プロジェクト (P14) で、一眼レフのデジタルカメラ15台を貸与。熱心な皆さんに写真を続けてほしいと願い、のちにこのカメラを福島県立郡山東高校の写真部に贈呈 (下写真) してくださいました。



クライスラー日本株式会社

プラン・ジャパン東日本大震災支援対策室のメンバーが被災地を駆け回るための車輦として、ジープ・チェロキー スポーツを2011年6月から貸与くださっています。総走行距離は約26,600キロ (2012年3月末現在) です。



イオン株式会社

石巻店で、「未来を写そう!」プロジェクト (P14) の成果発表の場を提供いただきました。また「みんなで笑顔!」プロジェクトでは、気仙沼店、石巻店のスペースをお借りしました。



味の素株式会社

プランが支援している仮設住宅集会所に、移動式調理台「どこでもキッチン」と社員ボランティアを派遣。ちらし寿司などを作る、料理教室を開催してくださいました。



プラン・ジャパン 東日本大震災緊急・復興支援 会計報告

(2011年3月～2012年3月)

	2012/3/31までの実績	予定	合計
収入			
寄付金	195,423,396	0	195,423,396
収入合計	195,423,396	0	195,423,396
支出			
事業費支出			
緊急支援物資支給			
ファミリーキット等、緊急支援物資支給	11,681,102	0	11,681,102
仮設住宅生活用品支給	24,886,500	0	24,886,500
学校再開に向けての支援			
学用品、副教材、制服支給等	39,915,956	0	39,915,956
幼稚園・保育園への備品支給	4,079,145	0	4,079,145
高校体育用品支援	9,986,113	500,000	10,486,113
被災地における心のケア支援			
教職員、保護者、NPOスタッフ向け等への研修	27,871,797	2,000,000	29,871,797
みんなで笑顔プロジェクト	25,932,837	0	25,932,837
避難所（仮設住宅）における子どものためのスペースの設置			
避難所におけるキッズ・スペースの設置運営	13,211,434	1,500,000	14,711,434
仮設住宅集会所支援	4,891,559	800,000	5,691,559
子どもたちの声の発信	20,010,225	2,900,000	22,910,225
事業費支出小計	182,466,668	7,700,000	190,166,668
管理費支出	1,283,832	3,972,896	5,256,728
管理費支出小計	1,283,832	3,972,896	5,256,728
支出合計	183,750,500	11,672,896	195,423,396
収支差額			0

プラン・ジャパン 東北での一年、そしてこれから

プラン・ジャパン事務局長 佐藤 活朗

東北での一年間の活動をふり振り返り、私たちはあらためて、国際NGOとしてプランがこれまで途上国で培ってきた知識や経験を国内での緊急・復興支援活動に役立てることができたと感じています。ここに、活動のふり振り返りと今後の方針をお伝えします。

東北での活動 効果的だったポイント

- プラン国際本部から派遣された専門家のアドバイスを受け、5つのカテゴリーでの総合的な活動計画を、2011年4月という比較的早い時点で練り上げることができたこと。これにより、物資の配布などの一時的な支援に終わらない、日々変化する現地のニーズにも適切に対応した一年間の活動が可能になりました
- 「面の展開」ができる、機動的な仕組みを作ることができたこと。特に以下で述べる、「子どもたちの心のケア支援」においては、宮城県の多くの被災地域で同じ質・内容の活動を行うことができました
- 地元の専門家や自治体の方々と密接な関係を築き、協働できたこと。地域の実情にあった、継続性のある活動を行うことができました
- 他の支援機関、自治体などとの連携の仕組みができたこと。学用品の配布などでは、重複や不足のない活動を行うことができました
- 子どもたちの生活スケジュールに配慮してプログラムを行ったこと。忙しい日本の子どもたちのニーズに対応することはチャレンジでした

とりわけ注力した「子どもの心のケア支援」その成果とは

- 教員・保護者、約3,500人にアプローチできましたが、これはこの何倍もの人数の子どもたちをケアできたことを意味します。早い段階でのケアにより、子どもたちが心理的に深刻な事態に陥るのを、広く防ぐことができたと感じています
- 震災から1年がたち、現地が望んでいるのは、「すべて支援に頼るのではなく、少しずつ自分の足で立ち上がって歩んでいきたい。そのためのサポートをしてほしい」ということ。東北の教員や保護者が今回得た知識やノウハウにより、被災した人々がお互いを支え合っていくことができます。

そしてそれが被災地の自信と元気につながっていきます

- 「WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA):現場の支援者のガイド」の日本語版や簡略版の発行に協力したことにより、被災地や被災地以外の人々にも文書化してノウハウを伝えることが可能になりました

今後の方向性と強化すべき点

「災害の世紀」という言葉に象徴されるように、日本を含む世界各国では引き続き、自然災害が増え続けることが予想されます。そのような状況下、プラン・ジャパンとしても、東日本大震災緊急・復興支援で培ったノウハウや知識を今後の活動に活かしていくことが重要だと考えています。プランによる東日本大震災緊急・復興支援は2012年3月で一旦の区切りを迎えましたが、それですべて終了とするのではなく、今後は以下のような活動を展開していく予定です。

● 「心理社会的支援」に関する広報・啓発活動

国内で、災害後の心理社会的支援への理解を広めるため、他の支援機関や政府と連携しながら活動します。特に、独立行政法人国立精神・神経医療研究センターやケア・宮城とともに、「WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA):現場の支援者のガイド」の普及に取り組めます。

● 防災や復興における「子どもの参加」に関する開発教育

世界各国で、防災体制作りや災害復興における子どもの参加が強化されるように、日本と海外の子どもたちの取り組みをそれぞれに紹介し、子どもたちの交流を促進します。また、開発教育教材を作成します。

● プラン・ジャパン事務局内での体制作り

他の支援国や活動国との連携を強化し、緊急支援に対応できる人材を育成します。また、緊急対応マニュアルを作成し、災害発生時の初動体制、初期の現地調査や活動の効果測定の強化など、今後の災害に備えます。

最後に、プランの東日本大震災緊急・復興支援にご協力いただいた多くの皆さま、初期の混乱や不安を乗り越えていっしょに活動してきた「ケア・宮城」や支援機関・自治体の皆さま、世界各国から駆けつけてくれた専門家やプラン職員たちに、心から感謝いたします。本当に、ありがとうございました。



Go ahead ~前進~

私は七ヶ浜町でミュージカルをやっています。この舞台は、震災で亡くなった人が姿形は違うけれど、「いつもそばにいるよ、悲しまないで」と残された人たちに語りかける内容です。台本には私の亡くなった友人についても書かれていました。まさかミュージカルで自分の友人の名前が出てくるとは思っていなかったので、最初はとても驚きました。練習をしていくうちに本当にその友人が私たちに「悲しまないで」と言っているように思えてきて、練習中にもかかわらず涙を流してしまうこともありました。ですが、この舞台が教えてくれたのは、いつまでも悲しんではいけなく、前を向いて歩いて行かなくてはいけないということです。亡くなった友人の分まで精一杯生きようと思いました。

(宮城県七ヶ浜中学校の2年生〈2011年度〉女子の作文)

※本誌15ページで紹介した冊子「Go ahead～前進～」より抜粋



公益財団法人プラン・ジャパン

〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋 2-11-22

サンタワーズセンタービル 11階

TEL:03-5481-0030 hello@plan-japan.org

www.plan-japan.org

子どもと楽しく、未来のしくみ

撮影／伊藤トオル、佐々木康

2012年5月31日発行

